

【モータースポーツコラム】

筆者：青山 義明

障がい者も参加する スポーツとしてのモータースポーツの在り方

今年は、東京オリンピック&パラリンピック開催の年となり、これまで以上に、多くの障がい者アスリートにスポットが当たるきっかけになったかと思います。

そんなオリンピック・イヤーですが、フランスでは、今年で89回目を数える世界三大レースのひとつと言われるル・マン24時間レースへ、障がい者ドライバーを擁して参戦するチームがありました。

SRT41というそのチームは、障がい者ドライバーによってル・マン本戦を目指すために結成したチームで、今回“イノベティブカー・クラス”という特別枠での参戦でしたが、きっちりと24時間を走り切り、見事に完走を果たしました。



(写真1) チーム・オーナーであるフレデリック・ソーセ氏も、人喰いバクテリアによる四肢欠損という障がい者です。このソーセ氏は2016年にル・マン本戦参戦の経験があります。彼がその経験の後に、次のプロジェクトとして立ち上げたのがこの「SRT41」、障がい者で構成したチームを結成し3か年計画でル・マンを目指すというものでした。

まず、2018年にフランス国内耐久シリーズへ、LMP3マシンでの参戦から始まり、2019年には欧州シリーズへステップアップ、と順を追って参戦を重ねてきて、本戦に出場する機会を得ています。

が、昨年はル・マン本戦に出場するためにマシンを一つ格上のLMP2マシンに乗り換えて、本戦に臨む予定だったのですが、このコロナ禍の影響で、事前に準備をする機会が取れないことから、これを断念し2021年の第89回大会への出場に予定を変更することとなったのです。

また当初は、ドライバー3名ともに障がい者であったものの、1名がチームから離脱したことで、今大会へは健常者ドライバーを加えた構成となりました。



写真1

また、このチームの参戦については、受け入れ側の理解も必要ということで、ル・マン本戦が行われるサルト・サーキットを舞台に開催された、2019年のロード・トゥ・ルマン（ル・マン本戦の前座レース）に参戦し、実際にレースに関わるスタッフとの確認を行い、そして今大会でも事前にこのチームだけの救出訓練も行われ、オフィシャルスタッフの勉強の機会もきちんと用意された形での参戦となっていました。

参戦するクラスがイノベティブカーという区分に分けられましたが、その車両は他の参戦各車両とは、ほんの少しだけ異なります。下肢での操作ができないドライバーのために (写真2) 手動装置を組み込んでいるマシンなのです。

現在のル・マン24時間レースには、ハイパーカー、LMP2、GT-Pro、GT-Amの4クラスの車両区分がありますが、このチームが使用するのは、レーシングマシンコンストラクターのオレカが製作したもので、LMP2マシンをベースとしながらも、最初から手動装置を装着し、ホモロゲーションを取得した公認車両となります。



写真2

ただ、コンストラクターが、手動装置を組み込んだレースマシンを製作したのは初めてということもあって、残念ながらまだ改善の余地は多分にある車両となっていました。車両重量は20kgも重くなってしまいましたし、操作性も今一つという点が否めません。この手動装置搭載マシンの進化もまだこれからといったところとは言えます。

また、ドライバー交替についても、車いすでピットロードに出て車両横まで移動することは危険という判断から、このSRT41チームは (写真3) ドライバー交替をピット内で行なうというレギュレーションが課されました。

そのため、ドライバー交替の度に他チームに対して、数分単位でのタイムロスとなっておりました。正式結果としては、SRT41の84号車は、総合32位という結果を得ていますが、チームの計算によると、そのタイムロス分を差し引くと25位には入れたのではないかと、ということとなります。



写真3



それを“皮算用”と思う方もいるかもしれませんが、でも、彼らは真剣です。このチームのドライバーは手動装置を使用してマシンを動かしていましたが、他のチームとの違いは、アクセルとブレーキとステアリングの操作を四肢で行なうか、二肢で行なうか、という違いだけです。

車両から降りれば健常者との違いは明確ですが、マシンに乗っている限り、コースサイドから観戦している限り、そこに障がい者と健常者の違いはありません。

最終的なアウトプットは、時速200kmとか300kmとか常人には出せないスピードで走行しますが、それは障がい者であろうと健常者だろうと同じように出せるわけです。

もちろんドライバーのフィジカルな部分はもちろん必要ですが、マシンに頼る部分が非常に大きいので、そこに障がい者と健常者の“違いとか差”というものは、解消できるのではないかと？ モータースポーツは、障がい者と健常者が同じ土俵で同じように戦える数少ないスポーツのひとつである、と考えているわけです。



そういう意味では、障がい者と健常者が一緒に競い合えるスポーツのひとつとしてモータースポーツが挙げられると思います。

このル・マン24時間レースに、SRT41から参戦した車いすドライバーのひとりである (写真4) 青木拓磨選手は、こういった自身のレース参戦だけではなく、国内でHDRS（ハンドドライブレーシングスクール）を開講する等、障がい者ドライバーの積極的なレース参戦を後押ししていきたいと様々な活動を展開しています。

いずれ、こういった活動が実を結んで、健常者と障がい者が分け隔てなくモータースポーツを楽しめるようになることを期待しています。



写真4



（プロフィール）

青山義明（あおやまよしあき）／愛知県出身 1969年生まれ
編集プロダクション会社での編集経験を重ねている中で、モータースポーツ関連の担当を経て、フリーランスへ。モータースポーツを中心に据えながらも、対象を広く2輪4輪問わず、カテゴリーも問わず、カメラも持って、単独でレースシーンを切りとっていく取材スタイルで、その時々に関心を持った対象を追いかけている

